

経変と変文

——本生譚を中心として——

一、経変図壁画と変文の関係

経変と変文

変文が絵解き講唱を基本とするものであったということは、ほぼ定説となっているが、⁽¹⁾その変文に附された絵画資料はきわめて少なく、わずかにパリの国立図書館にあるペリオ四五二四号の「降魔変文」画巻本と擬題される一本があるのみである。⁽²⁾こうした資料の少ないこともあってか、変文の基礎となった絵画は、莫高窟千仏洞に残される壁画ではなかったのかと考える傾向が、従来か

ら存在している。

つまり変文の絵解き講唱は、千仏洞の壁画を示しながら講唱されたのではないかということが、漠然と信じられてきたが、この説は必ずしも確実に証明されてきたわけではない。⁽³⁾

もちろん現存する変文の内容と同じ題材にもとづく変相図は莫高窟千仏洞に存在する。いまその両者の対照表を掲げて参考に供したい。

金 岡 照 光

○恒伽達品	3	
○波斯匿王女金剛品	2	「金剛髻女緣起」 S四五一— P三五九二 S二一—四 P二九五四 P三〇四八
○華天因緣品	1	
○慈力王血施品	1	「悉達太子修道因緣」「八相變」「太子成道經」參照
○降六師品	1	「降魔變文」參照
○微妙比丘尼變	2	
○七瓶金施品	3	
○貧女難陀品	1	
○大光明王始髮道品	1	
○摩訶斯那優婆夷品	2	
○出家功德尸梨必提品	1	
○沙弥守戒自殺品	3	
○伽旃延教老母賣貧品	1	
○金天品	1	
○散檀寧品	3	

張議潮出行圖 宋国夫人出行圖	地蔵与十王厅	如意輪観音変	観無量寿経変	観音経変	華嚴経変	報恩経変	勞度叉斗聖変	仏伝変相
1	15	65	84	13	29	32	14	27
『張義潮変文』P二九六二						『雙恩記』レニングラード・ アジア諸民族研究所蔵	「降魔変文」 S五五一一 P四五二五 S四三九八 北京蔵本 P四六一五	「悉達太子修道因縁」「八相 変」「破魔変文」 「太子成道経」 P三四九六 S三七一一 P二九九九 S四四八〇 P三四九六 S五八九二 P二九二四 S三〇九六 P二二九九 S二三五二 S五四八 雲字二四
						1	(内画巻本1)P4524 5	17

楞伽經變	睽子本生變	福田經變	普賢經變	得眼林故事變	維摩詰經變	薩埵太子本生變	密嚴經變	九色鹿王本生變	難陀出家因緣	虔闍尼婆梨王本生變	涅槃經變
12	6	2	24	2	68	9	4	1	1	2	4
					「維摩詰講經文」 S四五七一 P三〇七九 S三八七二 光字九四 P二一二二 羅振玉旧藏 P二二九二本	△悉達太子修道因緣」「八相變」「太子成道經」參照			「難陀出家緣起」P二二二四		
					7	12			1		

以上の表について若干の説明を加えておく。莫高窟壁画は、変相図の形をとっているものを主とし、仏像、菩薩像のみのものは、採りあげていない。なお、莫高窟壁画の全容は今日まだ完全には掌握できない。筆者もかつて彼地に赴いて、当時の敦煌文物研究所所長常書鴻先生の案内を受け、多くの窟院を視察・撮影を許されたが、四百九十余の窟の中、目撃しえたのは、その半数にすぎない。

幸いここ数年、莫高窟壁画の全容は、ほぼ完全に紹介されるようになった。

その一つは、中国で刊行された『敦煌莫高窟内容総録』である。（敦煌文物研究所整理、文物出版社、一九八二年刊・北京）

本書は、中華人民共和國創立以後、はじめて刊行された莫高窟壁画全体に関する目録である。窟院を文物研究所ナンバ―順に、窟院開創の推定年代、窟内部を東西南北毎に、それぞれ塑像、壁画を明らかにし、甬道、窟門に及び、現段階では、もつとも完備した窟院目録である。ただ残念なことには、塑像、壁画、窟院ともに、その正

○月光王頭施品	1	〔悉達太子修道因緣〕〔八相變〕〔太子成道經〕參照
○五百盲兒往返逐仏緣品	1	
○富奈貴緣品	1	
○大劫寶寧品	1	
○梨闍弥七子品	1	
○設頭羅健寧品	1	
○蓋事因緣品	1	
○淨居天請仏選品	1	
○善事太子入海品	1	
○善求惡求緣品	1	
○無惱指鬘品	2	
○檀賦鞞品	2	
○師質子摩頭羅世質品	3	
○象護品	2	
○波婆離品	3	
○沙弥均提品	2	

金光明經變	○長者子流水品	1	11		
○舍身品	1				
金剛經變	17	「金剛般若波羅蜜經講經文」 P 二二三三	1	13	
弥勒經變	88				
施身聞偈圖	3				
帝釈天・帝釈天妃變 (一説に東王公・西王母)	10				
藥師經變	96				
○九横死・十二大願	14				
思益梵天問經變	12				
毗沙門天王那吒會變	19				
毗楞竭梨王本生變	2				
須提拏太子本生變	6				
須闍提本生變	1				
涅槃圖	7				

確な大きさ、すなわち計測の数値が明らかにされていない。これはある意味では決定的な欠点である。壁画、塑像の規模の大小は、寄進者、供養者の地位、財力等を知りうる手がかりともなるし、窟院の性格や、当時の仏教信仰が如何なるものが主流となっていたかを知る重要な材料となる。この重大な記述が欠けていることは、本書の価値をいじめるしく減じさせている。この点では謝稚柳氏の『敦煌芸術叙録』（上海出版公司、一九五五年刊・上海）の詳細な計測には及ばない。将来これを附した改訂がなされることが望ましい。

ただ、本書が謝稚柳氏の著よりもまさっている点は、当然のことながら、二十数年の期間を経ているので、謝氏の調査のときには知ることのできなかった新しい窟を多く発見し、記録にとどめていることである。段文傑現所長の序文にもあるとおり、とくに一九六一年より三年にわたった大修復の結果、さまざまな新事実が発見された。このため、現時点では、本書によって、初めて知り得る窟院が少なくないのである。さらにまた本書には、史董湘氏の「關於敦煌莫高窟内容総録」という概観が附

され、巻末には「塑像」及び「壁画」の内容別の画引き索引が附されていることは、本書の利用価値をいじめるしく高めている。

さらに近年本邦において、東山健吾成城大学教授他諸氏の編集により、平凡社・中国文物出版社との提携出版に係る『中国石窟』全集、『中国石窟・敦煌莫高窟』全五巻（一九八〇・八三年・東京）が刊行され、細密な写真とともに、とくにその目録の巻で、莫高窟壁画・塑像の全容がほぼ明らかになった。

上掲の表の壁画の内容は、『敦煌莫高窟内容総録』及び謝稚柳『敦煌芸術叙録』及び右の『中国石窟・敦煌莫高窟』の三書を照合し、併せて筆者の実地調査の結果を参照したものである。なお一言附言すれば、近年莫高窟の見学・撮影はいじめるしく制限が強化されている由で、今後は、中国当局の国家規模による調査・報告に俟つ他はなくなるかも知れないので、この点は注意を要する所であろう。

以上のように、既刊の目録、写真集を主として参考にしたが、敦煌壁画の全容は必ずしも、これらによって、

全面的に信頼がおけるとは考えられない。なお今後の周到な調査によって、若干の増補や、改訂が必要とされよう。従って上掲の表の若干の部分は、あるいは、誤謬や、記入洩れを含んでいるとも考えられる。しかし、上記三書を照合した結果、その大部分は当を得ているものと考えられるので、これを掲げた次第である。

次に「講経文・変文」については、本邦所蔵の北京・パリ・ロンドンの写本の影印を主材とした。ただし、ここでは一般の所謂經典の写本そのものは対象としない。与えられた題名が「経変と変文」というものである為、經典そのものではなく、經典を何等かの形でパラフレーズした講唱体の写本、即ち変文及び講経文を対象とした。それは単に与えられた課題がそうであったばかりでなく、經典によって流布されていたということ、經典を通俗的な体に変えて流布していたということとは、必ずしも過不足なく一致するものではないからである。たとえば金剛經の写本が如何に多種あったからといっても、それがたとえば、金剛經変文という体によって、多種、変形流布していたとは言い切れないのである。寺におけ

る正式、もしくは学習用の写経と、変文・講経文による対俗講唱とは自ら機能が異なるし、需要も異なる。筆者は必ずしも、変文・講経文が、対俗説法の台本として、写経と異なる意識で筆写されていたとは考えず、かなり写経と近い意識の下で作成されていたと考えているものであるが、それにしても、この両者を同一に扱うことは妥当ではない。従って上掲の表にあげたのは、そうした講唱体の文献で、しかも経変という壁画と対比する意味で、すべて仏典に取材したものに限り、中国固有の説話故事によるものは、採りあげていないことを、お断りしておく。以上のコメントを附した上で、上掲の表にあらわれた数値的な結果について、いささか検討を加えてみたいと思う。

上掲の表で、最初に挙げた「尸毗王本生図」が十二点の変文・講経文と対応することは、後に詳細に述べるが、これは必ずしも一点ずつ独立した写本を有するわけではなく、「悉達太子修道因縁」「八相変」「太子成道經」等の写本の中に、一句乃至二句にわたって、尸毗王の故事が述べられているにすぎないもので、それが総計十二点

の写本に残存しているものだとすることを了承していた
だきたい。しかもこれらの記述はほとんど異同がなく、
これを独立した写本点数に挙げることは、いささか不適
当かと思われるので、詳細は後述することとし、本節で
の比較の対象としない。

「月光王本生」「賢愚経・摩訶薩埵以身飼虎品」「同・慈
力王血施品」「同・月光王頭施品」「金光明経・舍身品」
「薩埵太子本生変」等の壁画に対応する変文についても
同様である。

なお「変相」「変文」という名称については、筆者は
これを正式の名称とすることには同意できないが、同一
の表の上で、区別する必要上、已むなく、変文という名称
を用いた部分がある。この点も併せてお断りしておく。

さて、以上を除いて、莫高窟壁画と、変文・講経文を数
値上から対応させて見ると、左の如き事実が附く。

- (1)「観音経変」に対応する「観音経変文」がほとんど存
しない。
- (2)「浄土三部経変」では、対応する写本は「阿弥陀経講
経文」一点のみである。

量に近い。

- (3)「賢愚経」各品に対応する写本は多い。とくに「降六
師品」変、「波斯匿王女金剛」変に対応する写本はか
なり多い。

- (4)「維摩詰経」変に対応する写本はかなり残存してい
る。

如上の特色を点検するとき、そこに自ら一つの方向が
あらわれてくる。

莫高窟の壁画の素材たる經典と、変文・講経文の素材
とは必ずしも一致しない。壁画に多く採られている經典
の大部分が、変文とは照応しないのである。もちろんす
べて一致しないという意味ではなく、「労度叉斗聖変」
と「降魔変文」の如く、きわめてよく対応している例もあ
る。また「維摩詰経変」にしてもそうである。ただ上掲の
表の写本の数値は、同一系統の異本を含むことをあら
かじめ了承して、単純計算ではないことを頭に入れてお
く必要がある。これらの点より見て、壁画変相即変文・
講経文講唱と短絡的に結びつかないことが明らかになっ
たと思う。たしかに変文・講経文は、敦煌莫高窟第一七

- (3)「法華経変」に対応するものは「妙法蓮華経講経文」
一点のみである。

- (4)「弥勒経変」に対応するものは「仏説観弥勒上生兜率
天経講経文」一点のみである。

- (5)「薬師経変」に対応する変文・講経文はない。

- (6)「楞伽経変」に対応する変文・講経文はない。

右の如く、表によって判明する変相の数値で、莫高窟
中比較的多数を占め、且つ經典としても、多くの写経を
残しているものが、対応する変文・講経文が以外に少な
いのである。「薬師経変」が九六点の変相壁画を残して
いるにもかかわらず、変文・講経文の写本は一点も残し
ていないことや、浄土変相に対応する写本がきわ
めて少ないことなどは、その一例である。では比較的、
変相と変文が対応して残されている例を、右の表の中か
ら、指摘して見よう。

- (1)「父母恩重経変相」に対応する変文・講経文はかなり
ある。(ただし、変相図も少ないから、全体より見れば数は
多くない。)

- (2)仏伝の変相壁画と、対応する変文・講経文は、ほぼ等

号洞から発見されたもので、数種の中国説話に材を採っ
たものを除けば、大部分が仏典にもとづいているもの
で、壁画と素材が共通であることは確かである。ただ、
壁画に描かれた仏典が、そのまま変文・講経文にも採り
あげられているわけではない。変相壁画と変文・講経文
との関係は、きわめて微妙なもので、個々の事例に即し
て、きめ細かく実証していく必要があるようである。今
そのすべてを説明して行くことは紙幅も許さないので、
本生譚の壁画と、変文とを採りあげて、一つの問題提起
としておくこととしたい。

二、本生譚変相壁画と本生譚変文

いうまでもなく、仏陀が現世にシッダールタ Siddhar-
tha 太子として生誕する以前、すなわちその前生におけ
る物語が本生譚 (ジャータカ Jataka) である。敦煌が仏
教都市である以上、莫高窟の壁画に本生譚図が多く見ら
れることは当然である。前掲の表によっても、

- (1)尸毗王本生図 5点
- (2)月光王本生図 2点

- (3) 毗楞竭梨王本生変 2点
- (4) 須提拏太子本生変 6点
- (5) 須闍提本生変 1点
- (6) 虔闍尼婆梨王本生図 2点
- (7) 薩埵太子本生図 9点
- (8) 睺子本生変 6点
- (9) 九色鹿王本生図 1点

それに『賢愚経』『金光明経』に収めてある「慈力王血施品」1点「摩訶薩埵以身飼虎品」7点「月光王頭施品」1点(以上『賢愚経』)「舍身品」1点(『金光明経』)を加えると、壁画に見られる本生変相図は三十点余になる。

嘗て本邦の佐和隆研教授は、その論考「敦煌石窟の壁画(『西域文化研究』第五—中央アジア仏教美術—一七七一七八頁・法蔵館刊・一九六二年・京都)において、一九五八年、敦煌壁画展が来日した折、敦煌文物研究所によって作成された壁画の主題別による表を示された。左のとおりである。

(A) 経変

西方阿弥陀淨土変	228点
東方藥師淨土変	69点
弥勒淨土変	68点
維摩経変	61点
法華経変	37点
天請問経変	28点
報恩経変	25点
華嚴経変	25点
思益梵天請問経変	18点
降魔変	6点
牢(劣)度叉斗聖変	15点
金剛経変	14点
金光明経変	10点
涅槃変	10点
楞伽経変	7点
密嚴経変	5点
陀羅尼経変	2点
漫漶不名経変	20点

(B) 本生事

- 薩埵那太子本生 7点
- 須達那太子本生 4点
- 尸毗王本生 3点
- 須闍提太子本生 1点
- 鹿王本生 1点
- 毗楞竭梨王本生 1点
- 摩訶瑜摩伽本生 1点
- 睺子本生 5点

(C) 仏伝

- 仏伝故事 10点
- 得眼林故事 2点
- 漢武帝迎金仏故事 1点

(尊像、曼荼羅等は省略する。—引用者—)

右記の佐和教授の表を、前節の表と比較すると、かなり数の上や、内容の上でも相異がある。

それは佐和教授の依拠した敦煌文物研究所の統計が、一九五一年から五八年に至る期間の調査であって、当時は窟院の総数が四百八十窟であったのに対し、『敦煌莫高窟内容総録』や、『中国石窟・敦煌莫高窟』の目録は一

九六一年から六三年にかけての補修工事を経て、四九二の窟院が整理されたためである。またある壁画の下に隠れていた別の壁画が発見されたこともあるし、如何なる経にもとづく変相であるか、同定を訂正した部分もあったからである。

それにしても、佐和教授の統計によれば、本生変は二十三点で、前記近年の統計三十三点と対照させて見れば、敦煌壁画の中で、本生譚に材をとるものは、かなりの数にのぼるものといわなければならぬ。

一九八一年試行創刊された蘭州大学敦煌学研究組の専刊誌「敦煌学研究輯刊」第一集に、賀世哲氏の「敦煌莫高窟北朝石窟与禅観」(同誌四一—五二頁)なる論文があり、それに北朝期の壁画の中における仏伝と本生変、仏家故事変についての表があげられ、賀氏は左の如く述べておられる。

仏教は「因果応報」「輪廻転生」を宣伝した。仏教の説法によれば、釈迦牟尼仏が成仏したのは、彼が前生に多くの「好」「功得」を積んで来て、

名	称	窟号	時代	位置
尸毗王本生		275	十六国	北壁
毗楞竭梨王本生		275	十六国	北壁
月光王本生		275	十六国	北壁
尸毗王本生		254	北魏	北壁
摩訶(訶)薩埵太子本生		254	北魏	南壁
鹿王本生		257	北魏	西壁
睺子本生		461	西魏	西壁龕楣
睺子本生(殘)		438	北周	窟頂北壁
須達提太子本生		296	北周	北壁
善事太子本生		296	北周	窟頂東・南壁
須大羣太子本生		428	北周	東壁
摩訶(訶)薩埵太子本生		428	北周	東壁
睺子本生		299	北周	窟頂東・北壁
摩訶(訶)薩埵太子本生		299	北周	窟頂南・西壁
同	右	301	北周	窟頂南・東壁
睺子本生		301	北周	窟頂北壁

〔敦煌学研究輯刊〕第一集、四六頁〕

「善報」を得たために、この世で成仏することができたのである。仏教ではこの種の記事を「本生」故事と呼んでいる。(中略)本生故事画は莫高窟北朝石窟中の画でもっとも多い故事画である。

早期には比較的少なく、晩期は多くなって来ている。現存十六幅で、上表のとおりである。

以上は、北朝期作と考えられる本生譚壁画の集計である。従って敦煌壁画すべてにわたるものではない。しかし前掲佐和教授の統計では本生変は二十三点、『敦煌莫高窟内容総録』では三十四点であり、賀世哲氏の統計が十六点北朝期の本生変と認められている点から見ても、敦煌壁画中の本生譚は、ほぼ北朝期に集中しているといつてよからう。

以上のように莫高窟変相壁画という造形資料によって見る限り本生変は、壁画の中で一大潮流をなしていたと認めることができる。

ところでひるがえって敦煌写本という文献資料に即して見ると、意外にも、これとはまったく逆の事実が明らかになる。すなわち敦煌文献の中で、変文・講経文類に

は、本生譚がきわめて少ないのである。現在までに明らかになっている本生譚写本として認められるものは、左の数点である。

- (1)「薩埵太子変文」 擬題 スタイン四七九四号
- (2)「須陀那本生変文」 同右 スタイン一三六五号
- (3)「須陀那太子変文」 同右 スタイン六九二三号
- (4)「身餓餓虎変文」 同右 北京藏本。編号不詳。

右の中(1)は、僅々二八行残存のフラグメントで、全長一・五フィート、影印にして一齣・首尾を欠いている。

ただその尾部に、

虎羸不能去、以竹自傷頸、遂噉王子身、唯有余□□

(虎つかされて去りもやらず、竹もて自ら頸を傷つく。遂に王子が身をくろう、たゞ余の□□あり。)

という句によって、後述する薩埵王子捨身飼虎本生の一部であることが明らかとなる。

(2)は三〇行存、天地三〇cm、長さ四四cm、のフラグメントで、やはり影印にして一齣で、欠損部分がきわめて多い。

(3)は一七行存。影印一齣のフラグメント。以上三点は

いずれも断簡で、どの程度詳細な本生譚が写記されていたのかは、明らかでなく、独立した本生譚写本であったのか、他の仏経、故事の一部だったのか、明らかにし難い。いずれも『敦煌変文集』(王重民等編。人民文学出版社。一九五七年・北京。世界書局。一九六一年・台北)には未収である。

(4)は問題の多い写本である。端的に言えば、本巻は原巻の所在が、現在では明らかでない。この写本については、かつて鄭振鐸氏が以下の如く紹介している。

釈迦牟尼仏の過去の「生」の物語、いわゆる「仏本生経」物語に関する変文で、現在知られているものは、けっして多くない。思うに(本来)少なかったはずである。多くの仏教物語の大半は、釈迦の過去の「生」の生活と関係のあるものである。今日もっとも完全な「仏本生」物語(ジャータカ)はすべてで五百数十則の多きに至っている。いましばらく知る所を挙げれば、「身餓餓虎変文」(擬題)が例とならう。

この一巻はわたし(鄭氏)が北京において入手した

ものである。写本の紙色と字体から見ると中唐時代の写本である。これは釈迦の本生故事を述べたものの一つである。釈迦は過去の一つの「生」の中で、一人の王子であった。ある日多勢の兄弟たちと一緒にある山を通った。すると路で一匹の飢えた虎が病気で食べ物もさがせないでいるのに出会った。兄弟たちはみな、顧みずに去って行った。釈迦は虎のそばに歩みより、虎に我が身を食べさせようとした。しかし飢えた虎は口を開く元気さえなかった。釈迦はそこで竹の枝をもつて、自ら我が身を刺した。そして血を虎の口にそそいだ。虎はようやく元気をとりもどし、この身を捨てた聖人を食べて去って行った。これは残巻であるが、大部分は保存されている。『中国俗文学史』上、二二四頁、作家出版社本。

鄭氏はなお『挿図本中国文学史』（商務印書館本）の第二冊においても、三三章「変文的発現」の箇所、この写本に触れ、中唐の写本であること、現存変文中最上限に属するものであらうと述べられ、同書四四九頁に写真図版として、この変文の一段が掲げられている。

何故今時大地動、江河林樹皆搖震
日乱精光如雲蔽、目瞶乳動異常時

にはじまる八行の文で、その写真の説明には、

仏本行集経変文の一段

この変文の字体はおおむね中唐の写本に類し、敦煌発見の変文中、最古のものである（西諦蔵）

とあり、『中国俗文学史』の「身餓餓虎変文」と同一写本であることが明らかである。

鄭西諦、すなわち鄭振鐸氏の所蔵本と考えられるが、いまその所在は明らかでない。本邦東洋文庫をはじめ、各種大学、研究機関に収められている北京所在の敦煌文献の全マイクロフィルムにも、この写本は収められていない。筆者も含めて、北京図書館その他中国の各地研究機関を訪れた人々も、この写本は確認していない。

嘗て周紹良氏は『敦煌変文彙録』（増訂本。上海出版公司、一九五五年・上海）の中で、「敦煌所出変文現存目録」と題して一二七種の写本名を挙げておられるが、そのNo. 50に、

仏本生経変文（身餓餓虎）鄭振鐸蔵・鄭振鐸著『中国俗

文学史』上冊二五五節引

とのみ記録しておられる所を見ると、周氏も原写巻を閲したものと考えられない。

また王重民氏等の『敦煌変文集』にもこの写巻の録文は収められていない。もしこの写巻が鄭振鐸氏のいうとおり中唐の写巻であったとすれば、本生譚変文に關してのみではなく、変文の編年史の上からも、貴重な存在となる。ただその入手経路について、鄭振鐸氏は、「北京で入手した」と述べているのみで、詳細な出処については明らかにしていない。当然第十七号藏経洞から直接発見されたものではないことになり、その真贋のほども明らかでない。いずれにせよ、きわめて問題の多い写本であるから、一日も早く同写巻の存在と、その全容を明らかにし、訂正、鑑定に供しうるような配慮を、中国斯学界にのぞんでやまない。

経変と変文

以上(1)～(4)までの写本は、変文の中に本生譚があったらしいことは推察できても、余りに断簡であったり、真贋、所在等が明らかでなかったりして、この四点をもつて、本生譚変文の流行を推断するには、やや躊躇を覚えて

ざるを得ない。

こう見てくると、たとえ右の四点を本生譚変文と認定しても、その数は余りに寡少であるといわなければならない。たとえば変文現存写本において、「目連変文」に属するものは、現存十一點、仏伝に属する（「太子成道経」等）十八點と比し、その差は明らかである。この寡少な本生譚変文を、前述した本生変相壁画の流行と対応させてみると、やや奇異に感ぜられる。本生故事は、では壁画としてのみ流行し、変文・講経文という写本としては流行しなかったのか否か、その点を次節で触れてみようと思う。

三、仏伝変文に見られる本生譚

本生譚変文として現存するものがきわめて少なく、かつ完璧な写本が保存されていないことは、すでに前節で述べたとおりである。

ところが、その理由で本生譚は講唱説法として大きな位置を占めていなかったとは断言できない点がある。それは、いわゆる仏伝変文の冒頭に、各種の本生譚が導入

部の役割りを果たしていたと明らかに認められる変文の写本が現存している点から指摘できるのである。

その一つとして、フランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale) 所蔵「太子成道経」一卷(ペリオ二九九九号)を検討して見たい。この写本はペリオ二九二四、ペリオ二二九九、スタイン五四八、スタイン二六八二、スタイン二三五二、スタイン四六二四、北京潜字八〇等の同系の写本をもつ。かなりの長編であり、首尾も完備している。(『敦煌変文集』巻四所収) 以下その導入部の文を掲げておく。

我本師釈迦牟尼求菩提縁、於過去無量世時、百千万劫、多生波羅奈国。広発四弘誓願、為求無上菩提。不惜身命、常以己身一切万物、給施衆生。慈力王時、見五夜叉、為為啖人血肉、飢火所逼、其王哀愍、以身布施、餒五夜叉。歌利王(時)、割截身体、節節支解。尸毗王時、割股救鳩鵲。月光王時、一一樹下、施頭千遍、求其智慧。宝燈王(時)剗身千龕、供養十方諸仏、身上燃千盞。薩埵王子時、捨身千遍、悉濟其餓虎。悉

達太子時、広開大藏、布施一切飢餓貧乏之人、令得飽満、兼所有国城妻子象馬七珍等、施一切衆生。

我が本師釈迦牟尼は菩提の縁を求められ、過去無量の世の時、百千万劫の間に、何度も波羅奈国において生を受けられました。広く四弘誓願を發せられ、無上の菩提を求めて、身命を惜しまず、常におのが身のすべてのものを、衆生に施与されました。慈力王であった時には、五夜叉が人の血肉を啖うため、飢苦にせまられているのを見られると、憐みを垂れて、我が身を布施され、五夜叉に餒わされました。歌利王であった時には、身体を裂かれて、節々を支解にされました。尸毗王の時には、股の肉を割かれて、かの鳩鵲を救われました。月光王の時には、一本一本の樹木の下で、頭を千遍も施与されて、眞の智慧を求められました。宝燈王の時には、身体に千の龕を剗り、十方諸仏に供養するため、身に千個の燈火を燃されました。薩埵太子であった時には、身を千遍も捨てて、悉く飢えた虎を救われました。(以下悉達太子の時の条は、嚴密には本生譚には入らないので、これを省略する。文中()で

補ったのは、ペリオ二九九九にない部分を他の異写本によつたものである。)

このペリオ本「太子成道経」の開端部分とまったく同じ構成の文が、北京図書館雲字二四号及び乃字九一号の「八相変」冒頭に見られる。異同はほとんどない。

さて、右の変文には、六つの本生譚の要約が羅列されている。左のとおりである。

- (1) 慈力王本生
- (2) 歌利王本生
- (3) 尸毗王本生
- (4) 月光王本生
- (5) 宝燈王本生
- (6) 薩埵太子本生

(1)の慈力王本生は、『賢愚経』巻二、一三に見られる本生譚で、同経「慈力王血施品」一三がそれに当る。(『大正蔵』巻四・三六〇頁。b-c)

マイトリバラ弥佐羅拔羅 Maitribala 王を漢訳で慈力という。この王の治世のとき、世は平和で、民心も高潔

だった。五夜叉はそのため人肉を食うことができなくなり、飢えに苦しみ、慈力王の布施行を知って、その救いを求めた。王は五夜叉に十善を誓わせて、その身を五夜叉に与えた。この王が釈尊の前生で、五夜叉は最初の仏弟子たる阿若憍陳如ら五人の比丘であったという。変文の要約も、ほぼ原典どおりである。この本生譚は「ジャータカマール」Jātakamālā 第八のマイトリバラ・ジャータカ Maitribala Jātaka に当り、宋の慧綯の『菩薩本生鬘論』巻三・「慈力王刺身血施五夜叉縁起」に漢訳もある。

(2)の歌利王本生は、変文では

歌利王時、割截身体、節節支解

の一二字にすぎず、また原典から見て、誤りで省略が目だつ。歌利王(羯利王)の故事は次のような漢訳がある。

『賢愚経』巻二「鬬提波利品」第二二

『六度集経』巻五「羅提和梵志本生」四四

『中本起経』巻上「転法輪品」第一

『僧伽羅刹所集経』巻上

『出曜経』巻二三「泥洹品」二八

等である。『賢愚経』によって大要を述べれば以下の通りである。(『大正蔵』第四卷、三五九頁c・三六〇頁b) 波羅捺国王が家族や家臣をつれて遊びに出かけ休息している、一人の侍女が林の中で静坐している忍辱仙人クハントイ・バーディン Kharati-vadin に会う、その説法を聞いた。仙人はあらゆることを忍辱する修行をしていた。王も仙人のところに行き、しきりに質問したが、仙人は何にも答えなかった。王は怒って、「汝の忍辱を試してやる」といって、仙人の手足・耳鼻を斬りつけた。仙人は平然として、「我が身が忍辱の行を完成したなら、元の身体になれ」と唱えると、手足も、耳鼻ももと通リになった。王はおどろいて、仙人に詫び、王宮につれもどって供養した。

右のような故事であるが、変文の行文はきわめて短文で、誤読しやすい。

歌利王時(忍辱仙人として)、割截身体、節節支解(された)

となるべきところである。入矢義高教授『仏教文学集』三頁(中国古典文学大系六〇。平凡社)は、そのように補

じ入り、王の身体を元通りにする。この王が釈尊の前生であった。

(4)は月光王本生。『賢愚経』巻六、「月光王頭施品」三一に見え、他に『大方便仏報恩経』巻五「慈品」にも漢訳が収められている。

月光王(旃陀羅婆羅神 Chandraprabha チャンドラプラバ)は、人民から尊敬されていたが、毘摩斯那王(Brahma Dīmaśana)という小国の領主が、王を嫉み、月光王を殺して頭をとってきたものには、領土半分と娘を与えようという。婆羅門の労度叉がその役を買って出る。彼は月光王にその頭をくれという。王は樹木に自分を縛りつけさせ、頭をとるようという。木の神がとめようとする、王は自分は前生から千の頭を人に布施しようとして、すでに九九九与えた。いまこれで願が達するのだから、とめるなという。労度叉は王の頭をとるが、依頼した毘摩斯那王は死んでしまい、何の手柄にもならず、労度叉は王の頭をもてあまし、捨ててしまう。人民は労度叉を憎み、食物を与えなかったので、とうとう労度叉は餓死してしまった。この月光王が釈尊の前生であるとい

足してある。この王を歌利王と漢訳しているのは鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜経』及び菩提流支訳の同経の二本のみで、この変文の冒頭に引かれた一句は、おそらく『金剛経』の系統を引くものだろうという岩本裕教授の説がある(仏伝・本生譚そのほか、『講座敦煌』「敦煌の文学文献」未刊)。この仙人が釈尊の前生の姿であった。

(3)は尸毗王本生で、いわゆるシヴィ・ジャータカ(Sivi-Jataka)によるものである。漢訳では『本生鬘論』巻一(二)「尸毗王救鵠命縁起」や、『賢愚経』巻一「梵天請法六事品」にその故事が収められている。

尸毗王が布施行を好むと聞いた帝釈天は、ヴィシヌヴァアカルマン毘首婆羯摩 Viśvakarman を鳩に化し、帝釈天自らは鷹に化して尸毗王の所へ行った。鷹に追われた鳩は、王に庇護を求めた。鷹は王に向い、鳩を食わしてくれといった。王は鳩のかわりに王の股の肉を切りとって鷹に与えるが、鳩の重さに足りなかった。そこで王は、手や脇を切りとって秤にのせるが、それでも足りなかった。遂に王は我が身すべてを秤にのせたところ、やっと鳩と同じ重さになった。帝釈天は王の捨身供養に感

う。

(5)は宝燈王本生である。『賢愚経』巻一「梵天請法六事品」第一、『菩薩本行経』巻上にその漢訳がある。

豊かな国土を有し、人民に慕われていた虔闍尼婆利という人がいた。この王は慈悲深く、求道の士であった。

婆羅門労度叉は、もし王が自身の体に穴をあけ、そこに千の燈明をとぼしたら、正法を聞かせてやろうという。

王は、いまあるは必ず滅し、高位のものも必ず墮ち、会う者は必ず別れ、生者は必ず死ぬという四言四句の偈を聞いて、すぐ自分の体中に穴をあけ、千燈をとす。帝釈天はそれを聞いて、王の身体を元通りにしてやる。これは『菩薩本行経』(『大正蔵経』三卷、一一二頁c・一一三頁c)においては、王の名は度闍那謝梨となっている。

いずれの經典にも宝燈王という名はない。あるいは敦煌周辺で称せられていた流布名なのであろうか。

(6)はすでに前に触れた薩埵太子本生である。『賢愚経』巻一「摩訶薩埵以身飼虎品」第二にてでくる。『本生鬘論』巻一、『六度集経』四、『金光明経』「捨身品」等にも漢訳がある。

ある国に三人の王子がいた。ある日、王、妃、三王子、家臣がつれ出って、外に遊びに出かけた。すると牝虎が子を生んでいるのを見た。虎は飢えのため、子虎を食べようとしていた。末弟の摩訶薩埵、マハーサットヴァ Mahasattva は虎の前に身を投げて布施しようとした。つかれた虎には王子を食べる体力がなかった。王子は木の尖端を身体に刺し、血を出して虎に飲ませた。虎は活気づいて、王子を食うことができた。王子は兜率天に再生し、父母に法を説いた。この王子が釈尊の前生である。

さて、以上六種の本生譚が、仏伝変文の導入部になっていることは、さまざまな問題を投げかけているが、大別して二つの問題に分類できる。

一つはこうした本生譚の各種の漢訳が、北朝期以後、広く敦煌周辺に流布していたため、前述のように短い本生譚の要約でも、聴衆には、十分その内容が理解できたと解釈しうることである。

このことは本稿で述べたように、莫高窟壁画に残る多くの本生譚図の存在と照応するものと考えられる。本生

譚が広く流布していたから、壁画にも描かれ、短文要約の講唱でも十分人々に理解できたのだと解釈しうる。

次に考えることは、右のように本生譚が導入部に要約されて存在していることは、あるいはこれらの短文の本生譚が元来一つ一つ独立した本生譚変文というべきものとして存在していたのではないかという問題である。

これは前述のように三点ほど本生譚の変文フラグメントが存在することからもうかがえるようである。ただ現存する先述の本生譚変文は余りに断簡にすぎ、確実な裏付けとはなり得ないようである。

本生譚壁画がかなり多いことから、本生譚変文も多く存在しているように思われるが、その対応関係は微妙であって、一概に結論は下しえない。ただ本生譚壁画が多く北朝期に集中しているのに対し、現存の変文や講經文の写本の多くは晩唐五代にわたるものが多い。そうすると本生譚は、変文の最盛期と思われる帰義軍時代以前に多く流布し、従って変文写本として定着するには至らなかったためとも考えうるのである。

四、おわりに

以上本生譚壁画と、変文の関係を見てきたが、本生譚にとどまらず、各種壁画の経変は必ずしも変文と一致しない点が多い。本稿冒頭に掲げた表の示すように、各種の経変の流布を示す数値と、同材に基づく変文の数値とは必ずしも一致しない。このことから、われわれは、壁画と変文の関係を安易に短絡することは避けなければならないことがわかる。

すなわち莫高窟の壁画は、供養のためか、禅定のために描かれたもので、講唱説法のために描かれたものとは論断できない。従って莫高窟の性格も、禅定窟、供養窟として考えられる可能性が強く、講唱説法の場合としては考え難いことである。

壁画と変文等の関係は、その一つ一つの資料について、もっと丹念にその関係を見て行く必要があるように思われる。

註

(1) 変文と絵解きが密接な関係にあるものであることはか

なり以前から主張されており、従来は日本の研究者によって立証されていたが、近年は中国及び欧米の研究者の中でも、その説は定着化しつつある。従来から、この点に触れた諸研究を列記すれば、左のとおりである。

沢田瑞穂：支那仏教唱導文学の生成（『智山学報』新13・14号）

小川環樹：変文と講史（『日本中国学会報』一九五四）

梅津次郎：変と変文（『国華』七六〇）N.V. Nicolas:

Sariputra et les six matres d'erreur fac-similé du

manuscript chinois 4524 de la Bibliothèque Nationale.

Présenté par N.V. Nicolas avec traduction et Com-

mentaire de texte (Mission Pelliot en Asie Centrale,

Serie in quario V.) Imprimerie Nationale Paris

1954

秋山光和：変文と絵解きの研究（『平安時代世俗画の研

究』第三篇・吉川弘文堂）1964

KANAOKA Shoko: On the word "Pien".

金岡照光：敦煌出土文学文献分類目録附解説―スタイン

本・ペリオ本（東洋文庫・敦煌文庫研究委員会）1971

同右：敦煌の絵物語（東方書店）1982

関徳棟「談変文」（『覺羣週刊』一九四六一卷一期～二期）

周紹良・白化文編『敦煌變文論文録』上巻。1982.4.

上海古籍出版社に再収）

周紹良：略説「変」字的来源（『大晚报・通俗文学』一九

四七年四月十四日。敦煌変文論文録」上巻再収。

王重民：敦煌変文研究（北京大学報告稿。『敦煌変文論文録』収録）1982

金維諾：「祇園記図」与変文（『文物参考資料』一九五八年十一期。『敦煌変文論文録』再収）1982

程毅中：關於変文的幾点探索（『舞樂遺産』増刊第十輯。一九六三年七月。『敦煌変文論文録』再収）

周紹良：談唐代民間文学（『新建設』一九六三年一月。『敦煌変文論文録』再収）

白化文：什麼是変文（『古典文学論叢』第二輯。『敦煌変文論文録』再収）

梁榮基：変相与插图話本（『新學報』創刊号・一九七六）

梅応運：敦煌変文与仏寺壁画之關係—変文与変相—（『新亞書院學術年刊』一一、一九六九年）

羅宗濤：變歌、変相与変文（『中華學苑』七）一九七一

以上は近年の論文中、とくに変文と絵画の關係を論じたものを中心としている。変文に關するビブリオグラフィ

は近刊の拙著に譲ることしたい。なお欧文では、Victor H. Mair: Tun-huang Popular Narratives (Cambridge University Press) 1983 が新知見に富んでいる。

(2) 「降魔変文」画卷本については、前掲註(1)のヴァン・ディエ・ニコラ女史の著及び秋山、梅津両教授の論文

に詳しい。

(3) このことについては、拙稿「識語上より見たる講經文・変文の一樣相」（『國訳一切經和漢撰述部史伝部』第三卷月報「三蔵」一九七、一九八号、一九八〇年四月、大東出版社・東京）に、現存変文写本等の跋文等から見て、変文がかなり強い信仰教育、追善供養等の目的をもつ写経意識に支えられていることを指摘しておいた。

(4) 「変」が画、写本ともに元來の名称で、「変相」「変文」というのは、その衍稱であろうということを、左記拙稿で指摘してある。「変・変相・変文札記」（『東洋學論叢』—東洋大学文学部紀要第三〇集、一九七七年三月）

（かなおか しょうこう・東洋大学教授）